

多摩デポ通信 第38号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2016年4月28日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三二・一八

●HP <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

総会・記念講演会への
「ご参加を！」

理事長 座間直壯

4月14日(木)夜、九州熊本地方を中心に大地震が発生し、甚大な災害となりました。現地では大規模な揺れに幾度となく見舞われ、これまでにない長い余震が続いています。図書館については、個別にはかなりの被害の様子が日本図書館協会に寄せられていますが、全体的な状況は、地震発生から一週間が過ぎた今も確かな状況はつかめていない模様です。被害に遭われている皆様にご心よりお見舞い申し上げます。

とともに、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

さて、多摩デポでは5月の最終日曜日の29日に9回目の定期総会の開催を予定しています。

これまでを振り返ると、毎年の総会記念講演会、25回を重ねた多摩デポ講座、そして今号で38号目となる多摩デポ通信などを通じ、いろいろな視点を踏まえて共同保存図書館の実現に向けた思考を続けてきました。昨年度は前年から続けた(株)カールとの共同研究により「多摩デポ・所蔵確認ツール(仮称)」を開発し、現在も精度の検証を続けています。

ぜひ

多摩デポの総会と記念講演に参加を！

日時：5月29日(日) 午後2時～4時40分
会場：国分寺労政会館 第1会議室 (地階)

国分寺駅南口5分 国分寺労政会館 ☎：042-323-8515

午後2時～3時 2016年度通常総会
3時20分～4時40分 記念講演



© Can Stock Photo

「県立と市町立図書館の協力による共同保存
図書館の実践」

講演：國松完二氏 (滋賀県立図書館長)

——場所を移して、5時頃からは懇親会

3月21日には中間報告会「ここまで進んだバーチャル共同保存図書館」開発中の新システムを体験してみよう」を開催し、これまでの横断検索よりもはるかに速く検索結果を表示し、多くの参加者から驚きの声をいただきました。

多摩デポは、このように試行錯誤を重ねながら共同保存図書館の実現に向けて歩みを進めてきました。また、共同保存の目的や意義についても多くの方々から必要性や重要性について賛同をいただき、さまざまな形でご支援やご協力をいただきました。

今回の総会記念講演会は、これらの実績を背景に多摩デポの原点に立ち返って、都道府県立図書館と市町村立図書館の本来の基本的役割について、皆さんとともに考えてみたいと思います。お招きする國松完二氏は滋賀県立図書館の生え抜きの館長

さんで、県立図書館を支え県内の図書館振興に努め、歴代の館長とともに滋賀県の図書館発展のために尽力されてきた方です。

私たちは、国分寺市に新たに開館する新都立多摩図書館には、単に機能分担した都立図書館の一部という位置づけではなく、多摩地域の市町村立図書館にとって地域の中心的な役割を担う新しい都立図書館のあり方を、多摩で住民と力を併せた協働の発想で築いてもらいたいと思っています。

このような視点からの総会・講演会を予定しています。みなさまのご参加をお待ちします。なお講演会には会員以外の方もご参加いただけます。誘い合わせてください。
(4月23日)



総会記念講演のご案内

國松館長の話を聞こう

バーチャルデポから、リアルデポの実現を

私たちはカーリルとの研究で技術的な手段を一つ手に入れたと思います。しかしバーチャルな共同保存、つまり各館の現有スペースのままで分担しての保存では、限界があります。次には以前からずっと課題である、リアルな保存書庫の問題に向き合わなければなりません。

共同保存図書館は、自治体を横断的につなぐ仕組みであり、広域的な図書館行政の問題です。広域的な保存を効率的に進めるには、多摩地域の図書館(あるいは都内すべての図書館)が都立図書館と保存においても有効な協力関係を作り上げる必要がありますでしょう。

この間、大量の横断検索を

してきた経験から見ても、都立図書館と市町村立図書館では蔵書の重なりが実際にかなり少なくなっています。重複の少ない蔵書を保存し合うことで、全市民利用のための意義ある保存が行なえるのではないのでしょうか。

総会の記念講演は、この二十年間、県内の図書館作りを進めるとともに、意識的に県と市町村との共同保存を育ててきた、滋賀県立図書館の國松完二館長です。滋賀県では市町村立図書館で除籍する県立未所蔵の資料は県立図書館に移管する共同保存を行なってきました。

國松館長は、滋賀県はかつて都立図書館が行なった市町村からの雑誌受入れ、保存事業などに刺激を受けてきたのだと言います。

東京で今、行なえることは滋賀と全く同じではない。けれどももらえるヒントは多いのではないのでしょうか。

キャリアとの 共同研究中間報告会

3月21日(月)午後1時
30分から国分寺労政会館第
3会議室で「ここまで進ん
だバーチャル共同保存図書
館」開発中の新システムを
体験してみよう」と題し
た発表を行いました。



新たに開発した「多摩デ
ポ・所蔵確認ツール(仮称)」
というシステムを紹介し、
使ってもらうことが大きな
目的で参加は34名。多摩地
域図書館からは7館10名の
現役職員の方にもご参加い
ただきました。

このシステムはISBN
を検索窓に入力するとその
本が多摩全体で何冊所蔵し
ているか、所蔵館はどこか
を瞬時に表示させる仕組み
です。都立図書館の統合検
索より格段に早く結果が返
ってきます。

報告会の前段では、市町
村立図書館長協議会がまと
めた「多摩地域における共
同利用図書館検討プロジェ
クトチーム報告書」につい
て西東京市に中川恭一氏か
ら説明をしていただき、そ
の後多摩デポ理事の齊藤誠
一から今回のシステムの精
度調査の結果を報告しまし
た。その上で先の「多摩デ

ポ・所蔵確認ツール(仮称)」
の概要と実際にパソコンや
タブレットを使った実演を
行いました。実際に見てい
ただくの中では、反応の速さ
に驚く方もいらっしやいま
した。

ただ、精度調査の結果と
して、システムの問題とい
うよりも各自自治体の図書館
が持っているISBNの持
ち方の問題(10桁と13桁の
存在とそれに伴うチェック
デジットの問題)や各図書
館のシステム稼働状況(点
検中やシステム変更に伴う
システム停止)によって結
果が異なることが指摘され
その改善が今後の課題です。
また今回のシステムはIS
BNが付与されている図書
に限って検索ができるため
ISBNがない資料のチェ
ック方法も課題となってい
ます。

システムは多摩デポのホ
ームページで公開していま

す。多くの方に使ってもら
い、感想やご意見をいただ
きたいと思っています。

体験して驚きと期待

金澤美津子

(東村山市立図書館)

「中間報告会」に参加しま
した。報告と感想をお伝えし
ます。

(1) これまでの経過と
多摩デポがめざすもの

多摩地域の図書館の多く
が開館後40年以上経つ中で、
いずれも収蔵率が100%
を大きく上回っており、毎年
地域全体で50万冊以上の除
籍があります。けれども最後
の1冊を確認する効率的な
手立てがなく、いつの間にか
貴重な資料がなくなるかも
しれない状況が続いていま
す。

多摩デポでは、講座やブックレットを通じて啓発活動を行いつつ、共同保存図書館の実現を探ってきましたが、資金・物流・場所の確保が容易ではないため、当面各図書館で多摩地域最後の2冊を確実に保存して、バーチャルに共同保存図書館を実現すべく、有効な検索手法を(株)カーリルと共同研究しています。

今回はその成果を実際に体験してもらって、意見を募りたいとのことでした。

(2) 多摩地域の動き

主に館長協議会の動きを中心に、協議会の提案やアンケートに沿って、共同利用図書館に関する考え方や裏付けについての報告がありました。

(3) (株)カーリルの検索システムに対する精度調査の結果報告

調査の目的は、都立図書館の統合検索と(株)カーリルと開発した検索システムの結果に差異がないか、各図書館のISBNデータに不備がないか、最後の2冊を確実に確保できるかを検証することです。

結果、調査サンプルの約25%に差異が生じたようですが、システムの問題というよりもISBNデータの持ち方(ISBN10桁と13桁の違いと、それによるチエックデジット)の問題、各自治体の稼働していない時間の問題などが考えられるとのことでした。この点は、今後も検証をしていくそうです。

(4) 共同研究の成果と検索システムのデモンストラーション

日本最大の図書館検索サイトである(株)カーリルの技術を応用して、所蔵確認を

簡単に最小限のコストでメンテナンスフリーでできないかとシステム開発を行なっているそうです。

実際に検索を試みて、都立図書館の統合検索に比べて飛躍的に速く検索ができました。ISBNが付与されている資料だけになります。この速度であれば、除籍の時に最後の2冊の確認も現実的な作業となるように感じました。

会場からは、貸出禁止の資料がわかるとよい、表示画面にISBNだけでなく書名も表示されるとよいなどの要望が出ました。

更に(株)カーリルではISBNのない書誌についても取り組んでいくとのことでした。

今回の報告会に参加して、リアル共同保存図書館が当面無理ならバーチャルで、と方向転換して検索技術を持つ(株)カーリルと共同研究を行うなど、多摩デポの対応

力に頭が下がりました。また、(株)カーリルの技術力にも驚きました。都立図書館の統合検索ではあんなに時間がかかるのに、ほとんど一瞬で結果が出るのは気持ちのよいものでした。現在除籍しようとするものは、古くてISBNがない資料も多いので、今後の開発に大いに期待しています。

	報告会に参加して 鈴木由美子 (中野区在住)

私は、とことん「23区ボケ」した市民でした！
のっけからへんな感想で申し訳ないのですが、私は中野区民歴三十余年、多摩地域で開かれる図書館関係の会合に出たのは久しぶりです。
自治体の正規職員である図書館員が、これほどの人数、

集まった場に身を置くのは、とても新鮮な感じ。しかもその図書館員達が、図書館について知識と愛情を持ち、戦略的な行動力を備えているという事実が驚いたのです。

はてさて、3月21日に開催されたこの会合のテーマ「バーチャル共同保存図書館」は、多摩デポが、(株)カーリルと共同研究で作成しているシステムのこと。多摩地域全体の図書館で所蔵冊数が2冊以下となった資料を、容易に検索できるようにしてきましたというのです。

石原都政下で大規模除籍された都立図書館蔵書を、都内の第一線図書館が受け入れたこと、共同保存図書館構想を掲げる「多摩むすび」の活動が始まったこと位は、私も知っていました。

以来十数年が経過して、最近耳にするようになったこのバーチャル何とかとはどんなものなのか。

経緯と仕組みの説明を経て、デモンストレーションが始まります。「待ってました」という瞬間ですね。

各テーブルの上にはパソコンが配置され、各図書館からメンバーが借りてきたらしい図書が積んであります。本の裏表紙にあるISBNの数字上のバーコードを読み取り機をあてると、チャランと音がして、多摩地域の各図書館での所蔵状況が画面に出るのです。

貸出し中かどうかもわかる。小金井市立図書館、稲城市立図書館など机上にある本を試してみると、複本の無さそうな専門的な本は、貸出中と出る。なるほど、その本がここに来ていたものね。バッグから私物のNHK出版新書を出して読み取ってみると、ずらっと所蔵館が出たので、どの館にもある本だとわかりました。

このシステムを使い、多摩地域であと2冊以内となつ

た本のISBNを読み取ったときは、気楽なチャランではなく、別の警告音が出て、廃棄してはいけないことを知らせてくれるようにするそうです。警告音を聞いた図書館員は一瞬緊張し、責任と誇りを感じることでしよう。

共同保存書庫を建物として持ったわけではないけれど、システムによって、共同保存できる。志を持った企業人と図書館人が共同開発している画期的なシステムなのでした。

報告会の開かれた国分寺から、中央線で中野へ帰りました。

同じ3月に行われた中野区立中央図書館の利用者懇談会に、図書館側から出席していたのは、区立全館の指定管理者「ヴィアックス・紀伊国屋書店共同事業体」の職員だけでした。区の正規職員の姿が全く見えないことに、参加者から批判の発言が出て

いました。

利用者が接する指定管理者のスタッフは感じのいい人が多く、今は不安定な雇用条件であっても優れた図書館員に育ってほしい、と願いながら本を借りる生活です。

23区は、図書館の暗黒大陸、荒廃したジャングルになっているのかも、と思います。多摩地域という外部に出かけたことが、自分が生きていく場所について気づきを得る機会にもなりました。

★提案している検索システムには、多摩デポホームページから入れます

★使ってみて、ここを直せないか、もっとこれが付け加わるといいな、などご意見を寄せてください

☆取り入れて、さらにいいものを作っていきます!



(株) カーリルとの共同

研究報告 その6

カーリルとの共同研究は、中間報告会を行い、「多摩デポ・所蔵確認ツール（仮称）」（以下、「本ツール」という）の概要を説明し、実際に使っていたいただきました。検索速度

に驚かれる方もおり、よいお披露目になったと思います。この中間報告会を契機に多摩デポのホームページで本ツールを公開し、意見を募っています。

中間報告会当日とその後寄せられたご意見をまとめると次のようになります。

▼①検索結果に資料のタイトルが表示できないか、▼②貸出中や禁帯の資料をわかるようにできないか、▼③検索結果が「0」なのか、エラーなのかを区別した表示にして欲しい。▼④特定の自治体について都立図書館統合検索と本ツールの検索結果に不整合が生じる場合がある。▼⑤ISBNの10桁と13桁で検索結果に不整合が出ることもある、▼⑥ISBNが付いていない資料についても検索できるようにしてもらいたい等。

4月21日に開催した定例研究会でこれらを話題にし

ました。①②③⑥については、今後実現させる方向で検討します。④についてはプログラムの改善を図りました。

また⑤のISBNの10桁と13桁で検索結果に不整合が出ることについて、さまざまな事例を出して検討を行いました。その結果、当初の本システムでは、ISBNのチェックデジットによるチェック機能に不備があり不整合が出るのが判明しました。これでは検索の信頼性が損なわれるため改善を図り、現在は、ISBNが正しく入力されない場合には検索結果が表示されないようになっています。

今後、大量の除籍候補資料データを一括で処理する場合の精度調査を行ないます。そしていよいよISBNの付いていない資料の検索方法の研究に入っていきます。



*はてさて、この名称は? 総会の場で発表の予定

2月27日(土)夜、「紙の本は滅びない」と題したジュンク堂の福嶋聡氏の講座に、国分寺労政会館に60人が集まりました。福嶋氏は今は大阪の難波書店長ですが、2000年代初頭、同書店池袋店が日本最大の売場に大增床した頃に同店副店長だった方です。書店員の立場から、書店・出版流通・言論の自由等について縦横に発言されています。多摩地域の図書館関係、市民の外にも、何人もの出版業界の方を含め、遠方からも様々な年齢の方が参加されました。

○私はなぜ図書館にコメントするのか？

図書館はよく利用する。書店とは置いてある本が違う。書店は返品できるので、「売れるかもしれない」感覚で品揃えができる。平積みの様子に「売れ始め」を知ってほしい。書店に置かれる期間は短



いが、図書館には長く置かれる。以前に10年ごとに輪切りの戦後フェアを考えたが、本が揃わず組めなかった。

○図書館と出版界の不毛で不可解な抗争

図書館と書店は近い業態だが違うところもある。風景が違い、流れる時間が違う。図書館では絶版本が手にできる。用意できないと売上にはならないが図書館を紹介することがある。人と本を繋

げられると、気が楽。図書館は本が残せるよう努力してほしい。本屋は「ない」と言えるが、図書館はそうはいかないと思う。

○読者の創造とさまざまな連携

本は読みたくなった時が出会いの時だ。いかに本が売れないかを訴える出版業界人がいる。図書館と本の面白さを知ってもらうために共闘したい。実際に実践の努力をした。大阪市立図書館のホールで、作家の講演と本を売る企画を提案・実施した。出版業界は著者と接点があるが、図書館は関係があまりない。一方、図書館の集客力はすごい。本の販売もその会場では売れるが、「近くの書店で」では、売れない。

○書物の時間

「紙の本」には独特なあり方がある。インターネットには時間の観念がない。検索結果からは時期がわからないものもある。「紙の本」が「時

系列で並べられる」ことにも意味がある。書物の独特の時間を痛感する。

○電子図書館のアポリア

二年前の自著『紙の本は、滅びない』はプロバガンダ。題名の主張は証明できてない。でも言わなきゃだめ。出版界は危機をおおるばかりで「紙の本」の良さをアピールする努力が足りない。

嶋浩一郎著『なぜ本屋に行くか』が生まれるのか』に書いてあるが、人間は自分の欲望を言語化できていないのは一部で、本屋に行くことに客に聞かれたら一緒に希望の本を見つけて。言われたタイトルぴったりでなければ×(バツ)というのは違うと思う。

○民主主義と図書館・書店

昨年、ジュンク堂渋谷店の民主主義をテーマにしたブックフェアが騒動になった。

私も難波店で「ノーヘイト」フエアをやり、クレームがきたが、何も言われない方がむしろ怖い。「ノーヘイト」本の間に「ヘイト」本も並べる。嫌韓・嫌中の意見があるのは事実。だから本が出版され、売れている。そもそも意見は偏っているもの。自分の考えだけが正しいというのは危険だ。議論すべきだし、そのために本がある。ネット情報はアクセス者のフィルターがかかった結果が見えるが、書店ではそれ以外の本や意見も目に入ること、色々な考えがわかる。

電子出版優位論者が「書店に行くこと」を必要悪のように言うが、「店に行く楽しさ」もある。「ネットで検索できればいい」だけだろうか？ 司書や書店員との対話からの気付きもある。醸成や発酵の時間を確保してくれるのが「紙の本」ではないか…。ブックレット化の予定があります。乞うご期待。

福嶋さん講演の感想

久光 歩

(三鷹市立図書館)

私は「紙の本は、滅びない」というテーマにももちろん惹かれましたが、図書館関係の団体が書店の方の講演を行う？ 書店側からみると書店と図書館はどのような関係を築いていけばいいと思っているのだろうか？ と頭の中の“？”を解消したくて参加しました。

講演では、福嶋さん自身が図書館のユーザーであり、図書館を自分の書齋のように考えているとのこと、近頃話題となつている図書館がベストセラーばかり貸出すので、出版界が打撃を受けるという説に対しての見解などをお話されました(ちなみに、福嶋さんは本が売れないのは図書館のせいではないとおっしゃっていました)。

この講演の中で特に印象に残っていることを二点述べたいと思います。

まず一点目は、書店と図書館はもっと仲良くできるといふ可能性をお話されたことです。私の勤める三鷹市立図書館では2013年から市内で働く現役の書店員にPOPの書き方を教えてもらうという講座を毎年行なっています。同じ本に携わる仕事をしていて、せっかく縁ができたので年に一回だけではなくもつと書店と図書館とで何かできればいいと常々思っていました。書店側もそう思ってくれている人がいて図書館だけの片思いでないわかりました。書店にとつて選書は返品できる仕入れであり、最新刊の平積みをするので読者の動向を掴んでいるので、書店に行ったときは何故平積みしているか聞いてほしいというお話もありました。

私自身、選書の参考に書店

に行くことは多いですが、書店員には目当ての本がどこにあるのか程度しか質問をしたことがなかったもので、このようなことも尋ねてほしいとはとても意外な言葉でした。様々な書店とのつながりを大切にして「読者と本の出合いの場」としての書店も図書館も盛り上げていける方法を探していきたいです。

二点目は福嶋さんがおっしゃっていた「読みたいと思つた時が新刊」はとても素敵な言葉だと思いました。その人が読みたいと思つた時がその人にとつての旬な本であり、タイミングが大事ということだと思いました。著書『紙の本は、滅びない』でもリアル書店はネット書店にはない見つける楽しみがあると述べられています。そのことは図書館にも共通していると感じています。出版年が古い本から最新刊まで図書館には多くの本が並ぶ中で、ブラウジングすることに

よってこれまでにない視点で書かれた本を見つめる楽しみは、新刊書が多く並ぶ書店と少し違った楽しみではないでしょうか。たくさんの本の中でセレンディピティ（思いがけない偶然の発見）を引き起せるような書架づくりを目指していきたいと思いました。

今自分が図書館員としてできることは何かと考えさせられる、とても前向きになれる講演でした。

福嶋聡さんの

長期連載コラム

「本屋とコンピュータ」

福嶋さんは人文書院という出版社のホームページに、コラムを毎月発表されています。もう15年以上続いていて、常に発信している、現場的な、逃げない大変なお仕事です。人文書院は京都にあり、年配世代には、白っぽいフランス装ふうの「サルトル全

集」など懐かしい本がたくさんある出版社ですが、この連載から『希望の書店論』（2007年刊）という著書も生まれています。いまこの本を開くと、2002年12月からの発信として「書店と図書館」問題が語られているなど、定点観測的な仕事として振り返ることもできます。勉強になり、喚起される内容です。チェックしてください。

さて、今年2月末発信の同コラム第161回は、「多摩デポ講座『紙の本は、滅びない』について」と題し、私たちの講座に出かける直前の心境・問題意識をとんでも丁寧に長く、書いていただいています。お読みになっていただければ、と思います。

（事務局 H）



多摩地域における相互貸借のあゆみ

多摩地域公立図書館大会 第一分科会に参加して

山口真理子
（元調布市立図書館）

2月2日の分科会に参加し、講演を聴きました。座間直壯さんが相互貸借の定義に始まり、東京都の協力事業の1990年までのあゆみを述べられました。

1972年都立中央図書館の新設。その時に「都立の役割は第一線の市区町村図書館のバックアップであること」を明確に打ち出します。

それにより多摩地域においては、旧都立三館、及び87年開館の都立多摩図書館によって行なわれてきた協力事業の歴史です。

私は71年に就職しましたので、都立中央図書館と都立多摩図書館の開館は同時代の出来事でした。都立図書館

の協力事業を受けた側として、遠い昔になってしまった初期の頃のことを思い出しながら、お話しを伺っていました。

都立中央開館前の日比谷図書館でも協力事業を行っていることを知ってはいいましたが、当時はあまり現実的には感じられませんでした。都立がバックアップをしてくれることを実感したのは、多摩の都立三館がそれぞれの役割を決め、後の都立多摩図書館で実行される業務を先んじて行なうようになってからです。

この日の配付資料に手書きの「協力貸出・協力複写利用の手引き」「協力日より・多摩版」や「探しています」のコピーがあり、懐かしく拝見しました。FAXすら全市にはなかった時代の、とにかく何とかして協力事業を実施しようとしていた熱意が伝わります。

横道にそれますが、資料の

「協力だより・多摩版」の端っこにちらりと見える記事、たぶん多摩地域図書館ソフトボール大会の記録なのは。私も数回参加して、派手に空振りしていました。

あの頃は協力車に都の職員の方が乗っておられて、市町立の職員とは普段から付き合ひがありました。都も市町も一つとなつて地域全体に図書館サービスを行なっていたように思います。

私には忘れられない思い出があります。調布の旧中央館で夕方のカウンター（玄關のすぐ前にありました）に立っていた時、お腹の大きい女の方が入って来られました。そしてにこやかに雑誌を渡してくださいました。都立に貸出しを申し込んでいた雑誌でした。

配付資料によると協力車の運行が始まったのが79年1月だそうですから、その前の時期だと思えます。妊婦通勤の時間を利用して都立職

員の方が途中下車して届けてくださいました。

あれほど感激したことはなく、都立の方に足を向けては寝られない、と皆で話したことでした。そして都立の協力事業を鮮烈に実感いたしました。

調布では、昔のあの小さい図書館でありながら、雑誌バックナンバーをかなり保存していましたが、都立がこんなにかんばってくれるんだから、もう一館で無理をすることもないんだ、と考えられるようになってきました。（その後、都立の方針は憂慮すべき方向に転換したようですが。）

講演後、元都立図書館の田中ヒロさんが協力サービスを始め側の思いを、とても謙虚に述べられました。

私は感謝の言葉を述べたいがために、この原稿を引き受けたくらいです。ありがとうございます。

総会へ

会員の方には2016年度通常総会の議案書と招請状を同封しています。

いよいよ新都立多摩図書館が開館する年度を迎えます。職員の方は休暇の融通が付けにくいとは思いますが、都合を付けられれば、総会にはぜひご出席ください。出席の際は議案書を持参されませうようにお願いします。

また、総会・懇親会の出欠票、委任状（正会員の方のみ）は5月10日までに郵送またはFAXでぜひご返送ください。総会の成立に、どうぞご協力ください。

総会後の國松館長の講演会は会員以外の方にも聞いていただけます。ご自由においでください。



★会の現勢

2016年4月1日

現在



●会員

(個人会員91名)
(団体会員3団体)

●賛助会員

(個人41名)
(団体1団体)

会の活動はみなさまの会費・ご寄付で支えられています。新年度用の振込用紙を同封しました。よろしくお願ひします。

●年会費

正会員 (個人・団体) 五千元

賛助会員一口 二千元

(個人一口団体五口以上)